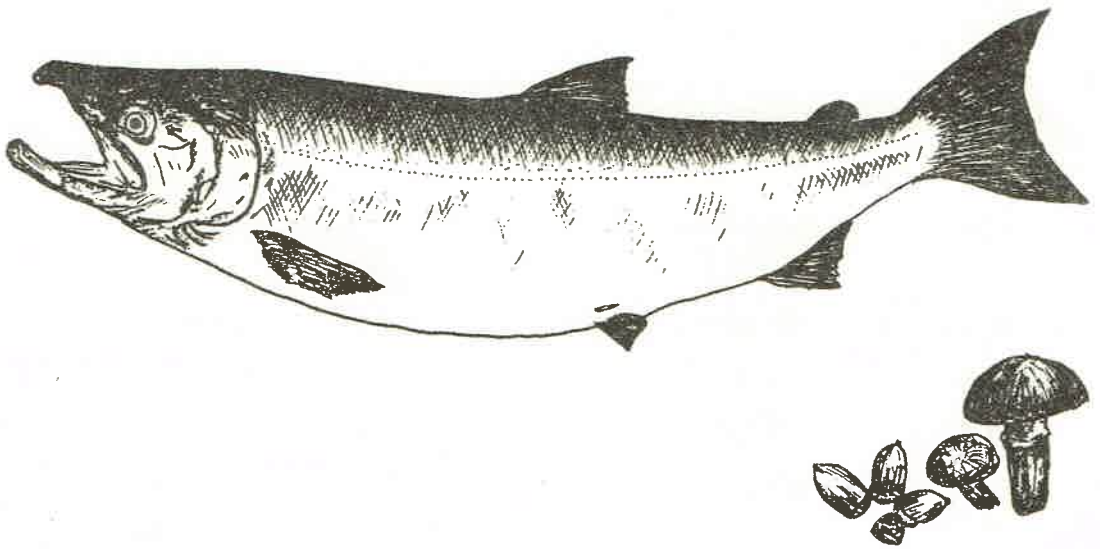


エゾマツ



No. 46

1998.10.12

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目 次

1. 巻頭言 秋深まる森の巨記に感動を重ねて 会長 大友 健 (1)
2. リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ (3)
3. 新会員紹介 (5)
4. キーワード (環境ホルモン) (10)
5. 国際フォーラム「ナチュラリストの集い」参加の記 (12)
6. 本の紹介 (北の果実酒・薬用酒) (15)
7. 北限のブナ林 余話 川端 功治 (17)
8. 観察会研修会情報 (26)
9. インターネット ホームページ公開中 (27)
10. 編集後記 (29)

秋深まる森の巨木に感動を重ねて

会 長 大 友 健

9月の下旬、他の組織でのボランティア活動に暮れた一日であった。訪れた森は「道民の森」で、自然界は中秋の季節を教えてくれているかのようであった。

この森は、1965年国際森林年を記念して、当別町、月形町にまたがり11000ヘクタールを1985年に開設され、森林における学習、レクリエーション、スポーツ、文化活動、林業体験など森林の総合利用の場として、整備が現在も進められている。

このときは、234ヘクタールのエリアである神居じり地区で、自然解説を楽しさ一杯で行ったのである。散策路が網目のようにあり、コース案内も設置されて、人々は原生の森やら、造成の森のさまざまを観察することが出来るのである。色づき始めた森の道を歩くこと30分程で、森のシンボルとも言われるミズナラの巨木が眼に入った。この樹木に私は、参加者全員に大きな感動を抱かせたく、感性の高まりを図りながら、距離をおいた樹木の姿、そして近づきつつの姿の違いなど語りあったのである。

推定樹齢450年、幹回り6、4メートルの標示板の前でしばし無言が続き、私は、各自それぞれ思いを巡らせてほしい一助にと、北海道内の各樹種を含めた巨木で10番目、北海道内ミズナラで4番目にランクされ、いかに森の主的存在感があるかを解説したのである。

この樹木が、伐採を免れて今世紀にあることを考えると、関係者が木霊を感じたか、歴史の生証人にして置きたかったのか、皆でロマンを追う楽しみにしばしふけることにした。

年代的な推察として、1548年に発芽したことになり、1537年生れの豊臣秀吉より11年遅く、また徳川家康の1542年生れより6年遅く大地に芽生えたことになり、日本の歴史を4世紀半眺め続けていることになる。

王者としての枝張り、根張りは風雪になお耐え抜く心意気を、メッセージとして人々に発しているような感じを持たせるに充分である。

私は、この森に何度も訪れ、時に触れ、折に触れこの樹木と対話を重ね、生命力を我が心にいただくことにしている。

北海道を代表すると言っても過言でないミズナラに、何時か関心が高まり1991年北海道大学図書刊行会発行の「北海道の自然史」をひもどき、小野、五十嵐、二人の先生が述べておられる、「ミズナラ林」の成立、ミズナラ急増の要因、を読ませていただいた。

北海道の針広混交林の成立時こそ、ミズナラが優勢であったこと、時代が8000年前であること、要因はこのころ氷期から気温の急上昇があったことを、化石花粉群の調査結果から述べられている。

一本の大木が育つには何百年、その樹木が森を形成し、森林機能を有する安定極相に至るまで時間はどのくらいなのだろうか。

これらのことなどに、想いをはせながら歩けば、見慣れた森にももっと別な表情が見え、感動に感動を重ねる楽しみがあるのではないだろうか。



のこんぎく (*Aster ageratoides*) きく科

リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ

9月の初旬、所用のため斜里から根室に向けて車を走らせる機会がありました。別海～春国岱のルートは秋のたたずまいが始まっていました。その内湾に目をこらすと沈水性の多年草 アマモ (*Zostera marina* ヒルシ科) がたくさん生えています。このアマモの根に近い部分が甘味があり、カモの仲間の好むエサになっていると言われています。

かつてはいろいろ利用され、葉は腐らせて肥料にしたり、乾燥させてわらぶとんにつめたり、パッキングに用いていました。

アマモは、リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシと呼ばれていますが、意味は「竜宮の乙姫の元結の切り外し」であり、海中に密生してユラユラゆれている様は、なるほどと納得させられます。また、昔は刈り取って海水をそそぎ、乾燥してそれを焼いて塩を取ったので、モシオグサ（藻塩草）とも言われています。

帰路は釧路～帯広を經由しました。十勝路では、エソノミセバヤ（ベンケイ科）を見つけました。落ち着いた赤色の気品のあるこの花は草の中にひっそりと咲

いていました。ミセバヤとは「だれかに見せようか」との意味があります。

植物名のいわれの中には、ちと残酷なものを探すこともできます。ママコノシリヌグイ（夕顔科）は「継子の尻拭い」の意であり、茎のさかむきの棘で継子が尻を拭かれる可哀相な境遇を連想させられ、この植物に申し訳ない気もしないではありません。同じ茎の棘でも、アキノウナギツカミ（夕顔科）のように、茎のトゲでウナギが掴めるとのユーモラスがほしいものです。植物名のいわれを調べてみると大変おもしろく興味がつきませんし、観察会などで紹介すると面白いでしょう。



アマモ

6月以降の活動

- 6月21日(日) ・恵庭の自然観察会 10:00~12:00
恵庭市恵庭公園 (下見 6月14日)
- 6月28日(日) ・神威岬の自然観察会 13:00~15:00
神威岬駐車場集合 (下見 6月28日 10:00~12:00)
- 7月 2日(木) ・野幌森林公園事務所主催 7月の森の観察会 協力参加
- 7月12日(日) ・ニセコの自然観察会 11:00~15:00
神仙沼休憩所集合 (下見 7月11日)
- 8月 2日(日) ・真駒内の自然観察会 10:00~12:00
地下鉄真駒内駅集合 (下見 7月26日)
- 8月 6日(木) ・野幌森林公園事務所主催 8月の森の観察会 協力参加
- 8月30日(日) ・利根別の自然観察会 10:00~12:00
利根別自然休養林駐車場集合 (下見 8月23日)
- 9月 9日(水) ・役員会 於:環境サポートセンター 18:30~
- 9月13日(日) ・宮城の沢の自然観察会 10:00~12:00 平和霊園集合
平和霊園駐車場集合 (下見 9月6日)
- 9月27日(日) ・野幌自然観察の集い 10:00~12:00 自然教室前集合
野幌森林公園自然教室前集合 (下見 9月20日)
- 10月10日(土) ・会報「エゾマツ」46号 発行



【 宮城の沢の自然観察会風景 9月13日 】

新会員紹介

7月17日から19日 様似町アポイ山荘で、平成10年度ボランティア・レンジャー育成研修会が行なわれました。

今年度も、ボランティア・レンジャー協議会から講師として、大友会長、川端副会長、五十嵐幹事が派遣されました。

育成研修会の修了者で、本会の趣旨に賛同され入会された方は下記の23名です。

新しい仲間として、観察会や研修会での活躍を期待しています。

札幌市	朝野 英昭	石山 浩一	北山 繁	小山 元子
	中野 武司	三鍋 良平	嶺田 泰宏	北上 八重子
	南 摩利子	山本 政司		
千歳市	小池 武博	前佛 マサ子		
浦河町	青柳 荘平	小武海 博一		
鶴川町	小山内 恵子	細野 智義		
様似町	阿部 雄一	倶知安町 金丸 忍	江別市 林 満	
小樽市	北原 武	伊達市 木村 益巳	新冠町 杉田 清	
網走市	斎藤 理			

札幌市北区 三 鍋 良 平

ボランティア・レンジャー育成研修会お疲れ様でした。私は現在、森林インストラクター試験を目指し、もっか学んでおります。日々アルバイトと遊び（全々できませんが）そして学習と、まっ学生のような生活をしております。

フリーターは色々なことができて良いですネ！。しかし周囲の視線はやはり厳しい様です。私はそれにメゲズにガンバります!!。皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

倶知安町 金丸 忍

9月に今年から後志支庁主催の自然観察会が毎週日曜日、イワオ・ヌプリで開催され、9月6日に参加させていただきましたが、沼巡りへの分岐の所であいにく雨になり、昼食後下山となりました。帰路にゴミを拾いながら来ましたが、タバコの吸い殻が多く、自然の中へは灰いれを持参するマナーを強く望みたく思いました。今後とも下山の時は、ゴミを拾いながら、美しいニセコ山系の自然を楽しみたく思っています。また、木道からの踏み出しの跡もいたいたしく残って悲しいものです。

札幌市南区 中野 武司

「何か楽しい事はないかな」と思っている時に目にした研修会に参加してみませんかの一文中に応募したところ、参加OKとなって三日間、自然の素晴らしさと、こんな楽しみ方もあるのかと、目からウロコの落ちる想いを味わいました。

聞くこと全て、あゝそうか、あゝそうかと、うなずきの連続で大変楽しかった事を思い出しています。

9月5日には、野幌森林公園の観察会に妻と二人で参加しました。講師の知識の深さに、人柄に感動して、自分はどんなことになるのか、どうしようかと考えている日々です。

千歳市 小池 武博

今年の1月から山作りをしています。5月に杉を6千坪植林しました。9月に見たところ杉の葉が1~2割ウサギかネズミに食べられています。林業指導事務所で調査をする予定です。

10月には1千坪の植林予定で、現在準備作業をしています。11、12月は杉林（35年杉3千坪）の笹刈りと枝払いを予定しています。この杉林は冬に根元廻りの枝払いと間伐をしましたが、ほとんど手入れをしていない林なので大変です。まして、私は現在右腕が40肩で痛いのです。でも、将来大きくなった杉林を見るため頑張ります。

20年後、研修会参加された方を招待します。皆さん頑張ってください。

伊達市 木村 益巳

研修会大変勉強になりました。「レンジャーは自然との掛け橋」という言葉、印象に残りました。

昨年よりネイチャーウォッチングクラブ(NWC)という小さな市民団体に活動しています。NWCは野草に詳しいM先生の会を引き継いだものですが、野鳥や虫など幅を広げています。会の目的は、自然を楽しむ、学ぶ、守る事ですが、現在は、自然を楽しむ事と少し学び、カラーの会報を発行しています。ボランティア・レンジャー協議会のご指導を頂きながら活動ができればと期待しています。

新冠町 杉田 清

この度、ボランティア・レンジャー育成研修会に参加させていただき、さっそく入会させていただきました。

私は、町の塵芥収集運搬業等をしております。近年、ゴミについては、各方面でいろいろ取り沙汰されています。環境問題には関心があり、日頃から気にしておりますが、研修会では知らないことの多さに改めて勉強しなければ…と考えさせられました。仕事をしながらですので、自分のできる範囲で、自然を守っていくことの大切さを身近な人々に伝えたいのです。

札幌市厚別区 小山 元子

アポイ岳の研修から時を経た今も、自然の中で学んだ楽しい思い出は鮮明に脳裏に焼きついて居ります。

9月5日出発で、イタリア旅行に出ましたが、地球上の森林面積が1/3と勉強をした時の疑問が解けました。

シベリヤ上空から見た景色は月世界の様、イタリアは石の建物で街は並で居てもトスカーナ地方は絵の様な穀倉地帯、公園には木々が繁って絵画にも緑が描かれ、昔から人々は大自然の中に憩いを求めて、感謝し、恐れながら生きていることが分りました。

た。日本の国土の素晴らしさに感謝して。

札幌市中央区 嶺田 泰宏

研修会に参加して、教師及び環境サポートセンターの皆様方に、自然の生業を興味深くご指導頂き有り難うございます。幸い住居が森と林に恵まれた高台に位置しています。東に神宮の森、南に宮の森シャンツェ、北に三角山に囲まれ、四季移り変わる色彩を楽しめる環境にあります。

この贅沢を、あたり前とっていた自分を恥ずかしく思います。この環境を、多くの人達に伝えるべく自然から学び、ボラレンの一人として、役立ちたいと考えています。

鶴川町 小山内 恵子

鶴川河口周辺では、今まで百種以上の野鳥が確認されていますが、干潟がここ十数年の間に壊滅的状態になっています。北海道野鳥愛護会を初め多くの方達に愛されている河口の鳥が危機に瀕しているのです。

私達の会は（ネイチャー研究会 in むかわ）このかけがえのない自然を守りたいと思っています。10月には鳥獣保護区が制定されます。フライ・ウェイ登録に向けてシギ、チドリのカウントも行っています。

しかし、一番大切なことは一人でも多くの人達に理解し支援していただく事です。

どうか、研修で知り合った多くの友達の皆さん、力をかけて下さい。鶴川の鳥を見に来て下さい。

札幌市南区 北山 繁

定年後、北海道に来て4年目になりました。第二の人生を自然保護の活動にと、来道しました。私の住んでいた千葉県は東京の衛星都市化で開発が進み、日帰りで本当

の自然に接することができる所は殆んどありません。札幌には野幌森林公園、藻岩山等々手軽に楽しめるところが沢山あり、私も毎週のように自然の恵みを満喫しています。今回の協議会入会を機に様々な観察会、自然案内を通して北海道の自然保護に役立ちたいと思っています。

今後とも先輩諸氏の御指導御鞭撻の程よろしく申し上げます。

感 想

小樽市 北 原 武

観察会は、草木の名前を覚える事のみではなく……と教えられながらも、まずは足元の草花を知り、次なる段階へと歩を進め、回を重ねる毎に、動物や自然の不思議、人々とのかかわり等にも、目が向くようになっていきます。

地元で、小人数でも、ブラブラ歩く事から始め、自分のフィールドを作り、四季折々の自然の営みに習い、心身に余裕のある限り、歩き回りたいと思います。

アポイでは、種々有り難うございました。

ボランティア・レンジャーに参加して

札幌市厚別区 山 上 八重子

ボランティア・レンジャー、なんとさわやか響きなのでしょう。私の心の中に深く響き渡りました。

それまでの私は、子育て、仕事、家事と自分自身のことは全て後回し……。それでも心の中では自分自身これからの生き方を考えつつ日々を過ごしていたのです。

2泊3日の研修会に参加したことで自分探しの旅の始まりです。心の中でニンマリとほほえんでいる私です。



キーワード



環境ホルモン

私たちをとりまく外気には、急性の毒性や発ガン性の面からは問題ないとしてさまざまな化学物質が放出されています。このような化学物質の中には、農薬や界面活性剤の代謝産物、抗酸化剤として用いられたノニルフェール、ポリカーボネート、また容器の原材料であるビスフェノールA、プラスチックの可塑性のフタル酸などがあります。これらの多くは体内に入って女性ホルモンの受容体に結合することにより、女性ホルモンと同じような作用をします。また、男性ホルモンや甲状腺ホルモンをじゃまする化学物質も検出されています。

このようなホルモンのような働きを持ったり、ホルモンの働きのじゃまをする化学物質に加えて、ホルモンとして作用することはわかっていないけれども、生殖に影響を及ぼす化学物質も含めて「外因性内分泌攪乱化学物質」といい、現在70種類ほどの化学物質がリストアップされています。

これらの化学物質が「環境」の中に放出されて「ホルモン」のような作用を持つことが多いので、1997年5月のNHKの「サイエンスアイ」という番組で「環境ホルモン」という用語が初めて使われました。

環境ホルモン問題は新しく起きた問題と考えられがちですが、決してそうではないのです。「環境ホルモン」という用語が新しいだけなのです。

1940年代から北アメリカの五大湖周辺では、農業に使用する農薬による大規模な汚染が明らかになりました。そして1962年、レイチェル・カーソンの「沈黙の春」が出版されました。この本は野生動物の繁殖力の減った原因は大量に散布された農薬であることを指摘し、農薬の自然環境や人間に及ぼす影響について告発し、警告を発した最初の本でもあります。出版された当初から非難攻撃も含めて大きな反響を呼びました。この著作は60年代の環境ブームの引き金になったといわれ、環境保護運動のバイブルの一つになっています。

最近、各国では「環境ホルモン」の実態に乗り出しています。特に先進的に取り組んでいるのは、OECD（経済協力開発機構）とアメリカのEPA（環境保護局）です。

OECDは「環境ホルモン」検査のガイドラインの方針が議論されています。

アメリカでは来年8月施行される法律にむけて、15000種くらいの合成化学物質をホルモン作用があるかないかを調べていたり、食品や水に「環境ホルモン」が入らないための方策を考えたり、万全の注意を払うことに心掛けています。

日本でも各省庁ごとに研究班を作って取り組みをはじめています。厚生省は、日本人の男性の精子が実際に減っているか調べて始めました。通産省は「環境ホルモン」の検出方法を検討しています。環境庁は今年度から野生動物に対する汚染調査に取り組む予定だそうです。

このように日本でも、環境ホルモンの調査、ホルモン様作用の検出系、作用機構の解明、野生動物に対する影響調査、ヒトへの影響の疫学調査などの研究が始まりましたが、まだまだ実態把握も不十分ですし、その影響との因果関係に至っては推論が幅をきかせているのが現状です。

—参考— 月刊「健」1998.5月号

環境学がわかる—アエラムック 4— 朝日新聞

環境ホルモン問題を知りたい方に

「沈黙の春」レイチェル・カーソン著 新潮文庫

「奪われし未来」シー・ア・コルボーン他 翔泳社

「メス化する自然」テボラ・キャドベリー 集英社

物質名	主な用途	年間使用量(トン)
スチレン	プラスチック原料	2,121,000
フタル酸ジ-2-エチルヘキシル (DEHP)	プラスチック可塑剤 (シート、レザー、電線被覆剤などビニール製品に通ずる)	291,000
ビスフェノールA	ポリカーボネート樹脂、エポキシ樹脂の原料	260,000
アジピン酸ジ-2-エチルヘキシル	プラスチック可塑剤 (耐油性を生かしたレザー、一般フィルム、シートなど)	30,000
ノニルフェノール	界面活性剤など	20,000
フタル酸ジ-n-ブチル (DBP)	プラスチック可塑剤 (ラッカー、接着剤、セロハン、印刷インキなど)	17,000
アルキルフェノール	油性フェノール樹脂、界面活性剤など	10,000
トリフルリン	除草剤	5,085
シマジン	トリアジン系除草剤	3,641
マンコゼブ (マンゼブ)	ジチオカーバメイト系殺菌剤	3,632
フタル酸ジ-n-ブチル (BBP)	プラスチック可塑剤 (床敷用、タイル、塗料用、人造皮革、室内装飾品など)	3,000
カルバリル	カーバメイト系殺虫剤	2,460
メソミル	カーバメイト系殺虫剤	1,293
2,4-ジクロロフェノキシ酢酸 (2,4-D)	除草剤	1,164
エンドスルファン	有機塩素系殺虫剤	1,149
馬拉チオン (別名: マラソン)	有機リン系殺虫剤	792
フタル酸ジエチル (DEP)	プラスチック可塑剤	700
ベノミル	カーバメイト系殺菌剤	688
アラクロール	除草剤	454
ジネブ	ジチオカーバメイト系殺菌剤	364
ジラム	ジチオカーバメイト系殺菌剤	364
ベルメトリン	ピレスロイド系殺虫剤	317
アトラジン	トリアジン系除草剤の一種	286
ケルセン、ジコホール	有機塩素系殺菌剤	233
ピンクロゾリン	殺菌剤	153
フェンバレート	ピレスロイド系殺虫剤	136
フタル酸ジシクロヘキシル (DCHP)	防湿セロファン用可塑剤 アクリルラッカー用可塑剤	100
メトリブジン	トリアジン系除草剤	67
ポリ臭化ビフェニール系 (PBB)	難燃剤	30

(年間使用量は、1993農業年度および1994年度の概算)

国際フォーラム「ナチュラリストの集い」参加の記

成田伸一 五十嵐一夫 田村允都

—修学旅行の気分で—

大阪行き寝台特急「トワイライトエクスプレス」が札幌駅を発車したのは、8月2日（日）の曇り空の日でした。私たち、成田、五十嵐、田村の三人が修学旅行に旅立つようなウキウキ気分で寝台特急に乗り込んだのは、8月5・6日の両日、富山県で開催される、国際フォーラム「ナチュラリストの集い」と第40回自然公園大会に参加することでした。参加することもさることながら、この機会を口実に羽を伸ばすもう一つの目的が三人三様、心の中に広がっていたのでした。

五十嵐氏は車内のシャワー室で身も心もサッパリ、缶ビールをグイグイ、早や職場や家庭をスッカリ忘れていた状態でしたし、夕刻、木古内沖のイカ釣りの漁り火を優雅に眺めている田村の姿をサロンカーで見ることができました。

成田氏が、夕食を食堂車でと予約の手配をされ、19:30からのディナーに心をときめかせながら食堂車の座席につきます。メニューは四季折々の沿線の素材を使ったフランス料理のフルコース。五十嵐氏の目利き・味利きでワインを注文、言葉に表せないリッチな気分が列車の軽い振動でさらに増幅していきます。外食はコンビニの弁当かラーメン・そばという毎日の生活はすっかり忘れていたのでした。

ワインの酔いでしきりと五十嵐氏は「富山地方は、梅雨も開けギラギラの夏空、ついでに立山を縦走しよう。」との発案に、学生時代山岳部でならした成田氏は静かにうなずき、田村も心がはずむ一時でした。

ワインが効いたのかグッスリ眠り、朝の車内放送で目をさましたのは、列車が、直江津の駅に着く頃でした。カーテンを開け外を眺めると、なんと、どんよりとした曇り空、前夜たっぷりと雨が降った気配がうかがえます。「親不知」のいわれの車内放送を聞きながらの海の様子も、どんより雲がたれこめています。

富山駅に着き、駅前で雨の歓迎を受けます。梅雨の開けていない北陸地方、これから始まる旅程に不安がよぎります。

— C. W. ニコルの話を聞く —

第40回自然公園大会のイベントの一つとして企画された国際フォーラム「ナチュラリストの集い」は、5日立山厚生年金休暇村センターで、6日は立山室堂周辺での「立山インタープリター」という日程です。

5日は、C. W. ニコルの基調講演、活動事例発表、パネルディスカッションと続き、後半自然公園大会に参加するというメニューが組まれています。

C. W. ニコルは英国に生れ、エチオピア、カナダで動物保護や環境保護に携わった経歴と持ち、現在、長野県黒姫に住み、執筆活動や講演活動を通して自然のあり様や自然保護について発信しています。流暢な日本語の語りは大変説得力のある内容でした。彼の語りの中で、特に印象に残ったことは、人との関連において自然が備える要件を次のように整理してくれました。

自 然	治安	モラルが機能していること（自然を守る教育）
	健康	いい水、いい空気（人間を優しく包む環境）
	美	美意識（美しいと感じる感性）

活動事例発表は、カナダ、アメリカから来日した2人と屋久島でエコツアーを企画している市川聡氏が、ビジネスとしての自然の関わりや現状・必要性についてスライドを使って発表しました。しかし、ボランティア活動として自然に関わっている参会者がほとんどのためか、特別興味のある話とは受けとめられませんでしたし、パネルディスカッションもその延長で語られていきました。

その中で、私たち北海道ボラレンと香川自然観察会の2団体が活動の現状発表の機会を与えられましたが、ビジネスとしての自然の関わりとボランティア活動としての自然の関わりの接点にまで話が発展しなかったことは残念でした。

2日目は、立山室堂周辺での「立山インタープリター」です。立山の空は私たちのためにほんの少しサービスをしてくれ、まずまずの天気でした。立山も春からの天候異変で、本来この時期に咲いているはずの高山植物も咲き終わったとの案内人の話を聞きながらの観察会でした。しかし、自然観察路のあちこちに、タテヤマリンドウ、ミヤマリンドウ、ウサギギク、そして雪溪が遅くまで残っていた斜面にはヨツバシオガマが満開でした。ライチョウの姿を見つけようと観察路の左右に目を

凝らしたのですが、姿を見せてくれません。

立山連峰の上部はあいにく雲がかかり、その奥の剣岳の勇姿を眺めることができなかったのは残念の一語につきますが、多雪に適応したタテヤマスギの巨木に驚いたり、200年以上も昔に建てられたという日本最古の山小屋を目の当りにして、その歴史の重みを感じたのでした。

—秘湯・名湯あれこれ—

黒部川は北アルプスの隆起にともなって侵蝕された谷で、立山連峰と後立山連峰を分ける世界的な大規模V峡谷を形作っています。河床勾配が急なことと降水量が多いことから、ダムによる発電がおこなわれています。このダムや発電所建設のために使われていた軌道が、トロッコ電車となり観光客を「宇奈月」から「樺平」まで運んでいます。

黒部峡谷はまた、温泉があちこちに湧出し、鐘釣・黒薙・祖母谷・阿曾原・名剣等の各温泉が点在しています。私たちは、秘湯として有名な、黒薙温泉に一泊しました。トロッコ電車を黒薙駅で下車、川底へと細い山道を下っていきます。岩から落ちる雨水のシャワーを避け、歩くこと20分ばかり、川岸にへばりつくように建っている黒薙温泉に着きます。水量を増した川のすさまじい流れをガラス越しに見ながら温泉につかる様はしばし俗界を忘れさせます。夜はイワナの骨酒で乾杯、そして何度となく湯につかったのでした。

翌朝、水量が引いたとのこと、宿の人が露天風呂に入れるよう準備をしてくれます。喜び勇んで川べりにある露天風呂にザブーン、見上げると遙かうえをトロッコ電車がのんびり動いているのが見えます。崖の縁を移動する野生のニホンザルも観察でき、自然の中に身も心も埋没することができました。

室堂周辺でのインタープリターが終わって解散後、室堂雷鳥沢ヒュッテにも一泊しました。標高2300mをこえる所に建つこのヒュッテにも温泉があります。ガスのかかった立山連峰を見ながら温泉につかります。晴れた立山連峰を間近に見ながらの温泉はどんな気分かとの思いが脳裏をかすめます。

「晴れた立山をまた訪れよう。」そんなことを考えながら、しばし湯につかっていたのでした。

(田村 記)



池田郁郎・池田ひろみ著

北の果実酒・薬用酒

北海道新聞社 1998. 9. 16発行

定 価 1 6 0 0 円+税

酒にはいろいろな種類があります。それを大きく分けると、醸造酒、蒸溜酒、混成酒に分けることができます。醸造酒とは、原料を発酵させた上澄で、糖、アミノ酸、有機酸などを含みます。日本酒、ブドウ酒（ワイン）、ビールなどがそれです。

蒸溜酒とは、醸造酒を蒸留しアルコールを主成分とした揮発性物質を集めて作ったもので、アルコール度は高く、糖やアミノ酸は含んでいません。焼酎、ウイスキー、ブランデー、泡盛、ウオッカなどが蒸溜酒です。

混成酒とは、醸造酒または蒸溜酒に糖分や色素、香料、薬味などを加えたもので、果実酒、薬用酒、みりん、屠蘇酒などです。

果実酒というのは、本来ブドウ酒やリンゴ酒などのように、果実の汁を発酵させて作る酒（ワインのラベルをよく見るとわかります）のことを指します。しかし、最近では、酒に植物の果実などを浸した非発酵性の「果実漬け酒」のことを一般に「果実酒」と呼んでいるようです。かつては、酒税法によって厳しく種類を制限されていましたが、今では穀類、ブドウ、ヤマブドウを除いて何でも自由に使ってよいことになっています。ですから、果実ばかりでなく花、葉、茎、根などを使って果実酒作りを楽しむことができます。しかし、どんな植物のどの部分、どのような果実、そして、その他の材料をどのような方法で、というレシピがあればと誰でもが思います。

この思いをかなえてくれたのが、道新から出版された「北の果実酒・薬用酒」です。著者はニセコに住み、ペンションのオーナーである 池田郁郎・池田ひろみご夫妻です。（池田郁郎氏は本会の会員です。）

目次を見ると ・花を使って 17種、・果実（野草）を使って 47種、栽培種を使って 41種、山野草を使って 21種、その他 10種に分け、採取法・作り方・飲み方、効

用について記述されています。そして、その一つ一つにまつわるエピソードや想いが語られていて大変興味を引きます。

あとがきに、この本を表す動機について、池田ひろみさんは次のように述べています。「…結婚して20年、2人で少しずつ増やしてきた果実酒について少しでも分りやすく伝えるために、目標を定めた旅にでませんか—という編集者のお誘いには、私たちにとって願ってもないものでした。…」さらに「…山々の緑の色が日々変化すると同じように果実酒の色付きも香りも知らないうちに変わっていきます。…醸されるものが素晴らしいものでありますよう願うとともに、自然が私たちへ与えてくれる恵みに改めて感謝を捧げたいと思います。」とも述べています。そして、会報「エゾマツ」編者の無理な依頼に次の一文を寄せていただいたことも記しておきます。

正確に気負わずに読んで楽しいものにとというのが書く時の私（池田ひろみ）のモットーでした。果実酒を最初に作った1976年6月、青酸のことも知らずに青い梅を一個丸かじりしたのに“何ともなかった”自分が恐ろしいくらいです。果実酒をつくるのが家庭をもつことの象徴のように思え、休みの日を利用して一升分漬けこみましたら、仕事から帰ってきた郁郎（本の中では“主人”となっています。これは編集の人が書き直してしまったものです）が「これは面白い」と言って次々と作りだしたのです。「レモンでもよさそうだ」「コーヒーは？」等々狭いアパートの部屋が果実酒の瓶だらけになったこともなつかしい思い出です。

それがこのような形で本にまとめ、出版までされるとは望外の幸せです。私の秘かな信条は『虚仮の一念岩をも通す』ですが、それを実践してくれた郁郎にこの場をお借りして感謝したいと思います。この本を書いて先ず念頭にうかび文にしてしまったのが「あとがき」だったことを、ここにだけ白状してしましましょう。



ペンション「ふきのとう」

ニセコに出かけたり宿泊する予定を組んでいる会員の皆さん、「ふきのとう」に連絡してみたらいかがでしょう。きっと、美味しい果実酒が試飲できることでしょう。 —連絡— 虻田郡ニセコ町482-1 TEL 0136-58-2623

4月の総会に先だって行われた川端副会長の講演の内容、前号に掲載の予定でしたが、紙面の都合で本号で紹介します。

北限のブナ林 余話 (講演会)

札幌市 川端 功治

私に何かお話しをなささいと言うことで、役員や皆さんから言われました。私はとても皆さんに向かってお話しをする柄でないのですが、かんべんしてくれない。やりなさい、やりなさいと言われましたので、私は考えたのです。スーパーに行くと、コンニャクや油揚げなどの包装紙の裏に正味期限というものがある。私も80才を越えています。「あなたは正味期限が切れかかっていますよ。いまの内にお話しなささい。」という意味の御厚意と有り難くお受けすることにしました。

それと同時に、私は黒松内の町長さんと、エコネットワークの小川巖さん、お二人に、黒松内の研修会の際、「よかれあしかれ記録として文章化すべきだ。それを利用する人はそれなりに整理検証するから、ぜひ書きなさい。」と。それからもう一つは、「たくさんの人にお話しする機会があったらお話しなささい。聞く人も参考になるところがあるはずです。」と言われたことです。じゃあ、この際一挙に解決しようということになり、私が後半お話しする内容はすでに文章化して、黒松内のブナセンターに届けてあります。

そのセンターの御理解もいただいて、うちのボランティア・レンジャーも大なり小なりこういう問題に関わりがあるので、機関紙「エゾマツ」に載せていただきたいということで、原稿を届けてあります。その点、だぶりますけれど、時間の許すあいだおしゃべりさせていただきます。高度な学術的なものではありません。身辺雑話みたいなお話しを致します。

北限のブナ林についての話しですが、余話という言葉を演題につけたしてもらいました。私の身辺にかかわった過去のことを、黒松内の町長さんやエコネットワークの小川巖さんに約束したことを中心にお話し申しあげたいと思います。

私、函館の営林署長をやっていた時、よく外国の人をお迎えして案内いたしました。一番に印象に残ったのはドイツのお客さんです。ドイツのお客さんが訪れる目的はいろいろありますが、一つはドイツの人は、日本の国を一部頂戴して、いうなれば租借地にして、各国の列強に負けない利権を設定しようとする考え方が昔からあったようです。昔の香港・上海あたり、租借地というのがありましたが、あれを頭に描いていたのではと思います。ですから、日本の林業を視察すると称して、函館に来ると

いう方が多いのです。その中でご相手したのが、むこうのドイツの営林署長。退職近くなると「長年御苦勞でした。あなたは研究・研鑽を積んできた。最後の仕上げに世界各国を回って、約一か月間、奥さんと世界旅行を楽しむという気持ちでいいが、そのかわり、帰ってから論文はしかと出してください。」そういう方が一番面白いのです。（注：その論文のテーマは日本の笹についてが一番多かったようです。）

ここで、ブナというとどんな木だと聞かれると、目の前にはないものですから、説明のしようがないわけですが、日本全国にある木でありながら、北海道には道南にしかない、やはり自然の保護なり、育成に携わる人にとっては、すこしでも知りたい気持ちがあるかと思えます。

それで、ドイツのお客さんに、ブナについて聞く時に「ドイツの国民は、ブナを『母の木』としてこよなく愛していると文献で理解しているんですけど、北海道のブナの木を見て、なつかしいなと感じますか。」と聞くと、「なんとも感じない。」と言うわけです。あくまでもこれは日本のブナの木で、ドイツ人はドイツのブナの木を『母の木』と言っているのですと答えます。

それから、もう一つは、私たちの自慢の林が、七飯町にガルトナルブナ林があります。これが先程申し上げたドイツの函館占領といったら大袈裟ですが、租借地を設けて経済流通の拠点にするべく、その先鋒としてガルトナルという領事が着任してきたのです。さっそく、土地の買い占め、それから、所謂、ドイツびいきのシンパの拡大、これが当時の幕府時代からの話なので、新しい明治政府はえらく緊張しまして、多額の金を払ってガルトナルの買い占めた土地の買い戻しの努力をして、無事にコト無きを得たのです。

そうしますと、本国の期待に背く結果になったので、ガルトナルは領事を解任され函館に居を移し、貿易商になりますが、望郷の念に駆られて、函館近辺の山からブナの苗木を山採し植えたのが、いま七飯町にあるガルトナルブナ林であるわけです。すばらしい成長をとげております。ちょうど電信柱をびっしり立てたような林であります。それで、もしかしたらドイツの領事だから、お国から木を取り寄せて植えたのではないか、日本の木ではないのではないか、ということで、ドイツから来たお客さんを連れていき見せるわけです。「ドイツのブナではありませんか」と聞くと、異口同音に「違う！」といます。それで、このブナ林は国産であると説明することにしました。そうすると、日本のブナの木を植えたとすれば、道内のブナ林にはお粗末なものが多い。これは、どういう訳か。生態に不可解なことが多く、今でも現場職員が悩んでおります。（注：レジメ7、8頁）

ドイツ人にブナの木を何に使うか、いくらぐらいに売れるのか聞いても、全然だめなんです。ドイツ人は、やはり狩猟民族だなあと感じるのは、ブナと共に暮らすパートナーの扱いなのです。ブナの木を売って、日本の国有林みたいに、職員の給料をひねりだそうという、ちゃちな考えは全然ないんですね。日本がブナを乱伐しているという情報はドイツ人もちゃんと知っていました。くだらないことをする国民だなあ、と思っていたんです。ドイツ人は、全然切る意志がないのです。それで、小さい時から木の下で、ままごと遊びをしたり、かくれんぼをしたり、要するに母に代わる立場にしているから、それで母の木なわけです。牧場にすると、ブナの木が生えている土地は、すごく牧草の生えがいいのです。畑にしてみても、ブナは肥えた土地の指標植物としてだいたい植物になっているのですが、こんなことは百も承知して手を出さない。これでは話しかみあわないわけです。

日本は道南から九州までずっとブナがあります。ただ、岩手から太平洋側はイヌブナなんです。あとは、道南から鹿児島まで、本ブナと称するブナの木なんです。材質的にちょっと違うのは、東北の特産の手工業、例えば、おわん、これなんかは、ブナの木が大変重宝で、昔からブナのおわんは庶民用のおわんとして使われ、もちろん高級品ではないのですが。ぼくも、なんとかあちこちに電話してみて、北海道のブナの木で加工してもらったら全然だめなんです。みんな割れてしまうのです。大変すじょうがいい。このことは、私は長年苦しんできたことなんですけれど、本州のブナの木の寿命は400年、ところが北海道では試験場で以前から寿命調査をやっていて250年。本州は400年で、この差はなぜなのだろうということが問題なのです。すごく成長が早いのです。北海道のブナの木は、そのかわり短命なのです。ですから、これが最終のブナの木の姿ですと見せたら、本州と大きさは変わらない。成長が早くすばらしいということなのですね。そのことイコール、おわんにならないということにつながるのです。

薪にして使っても、ナラ、イタヤが一級品、ブナは二級品、家具に使っても狂いやすい、加工の時も強く乾燥するとものすごくかたくなって、刃ものがもたない。始末に負えない木をどう利用開発するかということです。私は、東瀬棚の署長をやっているとき、営林署長というのは山の管理が仕事です。ところが、東瀬棚は製材工場を持っているのです。そして、乾燥工場もありました。その製材工場が4年に一回火事になるということで、署長になってからも夜警がしっかりやっているか見回りしなければという大変な仕事がおまけについていました。（注：この工場は若かりし頃の元知事田中敏文氏が開設、自ら経営しました）苦労して一生懸命技術開発につとめたんで

す。今の技術レベルは、フローリングなどに加工して有効に使っていますが、当時は値段が安ければ買いますというランクづけで、ブナを植えて、育てるという意欲はべしゃんこになっていました。

とにかく、売れないんですね。採算を割って売らなければならない企業なんてないわけで、それで、ブナには悪いけれども、黒松内の人たちと話してきたんですが、当時、薪にしかならないものが天然記念物なんてピンとこない、という感覚であったわけです。それが、今黒松内に行ってみると大変な宝物扱いで、結構なことです。人間は考え方が変わると、こうまで変わるのかという感じがいたしました。

それで、ブナは何に使えば評価されるのか、と聞かれたとき、そうですね、パチンコ板なら天下一品ですよ、と答えることにしました。パチンコは世界大戦末期からはやりだし、大戦後それが続き、現在のパチンコ産業の隆盛があるわけです。そのパチンコ用製作板を見に、名古屋までいったんですけど、クギ持ちが良いと高い評価でした。パチンコは店が終わりますとクギ師が玉のついた棒でクギの間をころがして調整するわけです。そして、明日はこの台を、まあ、半分ぐらい出すようにするとか、クギ師の腕次第なんですね。このクギを曲げれば、ピョンと横にはねて入らない、これを広げるとポンと入る。どんどん入って大当たりになると、開店の時、何番と何番が入るから、いい加減になったら、「お客さん、失礼ですが今日はもう御遠慮願います」ということをあらかじめ決めていた等の裏話を聞いたんです。玉のついた棒でトントントンとたたいて、クギ師ですから曲りを直すわけです。これは、ほかの木とかプラスチックにクギを打つと、すぐゆるんでしまうんです。そこに、もうれつに玉がぶつかるわけですが、ブナはクギもちが良いから評価が最高にいいわけです。

ブナの木の特性がよくわかるんです。くるいやすい、くされやすい、且つ堅くて刃物がいたむ、それに、全然更新の気配がない、切ったあとは当然ブナ以外の林になるわけですが、それで、国有林も道有林もいまだに試行錯誤を繰り返しているわけです。（レジメ6、7頁）

それでは、レジメの方を少し話しましょう。お手元にありますね。「北限のブナ林余話」その1ページを御覧になってください。黒松内の紹介が書いてあります。

これは、みなさんお持ちだと思いますが、「道南の自然を歩く」という北大図書刊行会の図書でして、札幌を歩く、空知を歩く、十勝を歩く、道南を歩く、という地質のことで、我々素人が勉強しようとしたらこの本にかぎります。これはおすすめで、まだ、お買いになっていない方は、自分のエリアのところをお買いになればと思い勧めるつもりでいれましたが、加えてもう一つの理由は、一番下の欄の左かわ、下から

3行目から、ちょっと読んでみると「第二次世界大戦中、町の財政が悪化した折りに伐採の計画が持ち上がりましたが、保護を求める町民の熱意によってその危機を乗り越えて今日に至っています。」これが今日私がお話ししようとするポイントになるわけです。大変上品にすらっと書いてありますが、これで結構でございますが、どの本を見てもこんな文章ですので、黒松内の町長さんに、ちょっと問題はありはしないか、もう少し黒松内の町民がいろいろと直面した問題があったはずだと、私が知っていることは、こうこうですとお話ししたわけです。それではと一言で町長さんはさっそく調べて、黒松内の歴史を説明する文書を作るとき考えましようというの、次の2ページの「その後の歌オブナ林」がその文なのです。飛行機をつくるプロペラにすごくいいと供出されそうになった、その危機を乗り越えてきました、という文章を御覧になっていただきたいと思います。

その次の御婦人の写真が載っている3ページ、五十嵐八枝子さん、この方が私たちが尊敬する女性でございます、花粉分析学のトップクラスの方なんです。大変偉大な貢献をなされて、世界の学会でも名が通っています。このことは、ブナが現在ある姿を解明してくれた功労者でもあるんです。この方の旦那さんが、北大の五十嵐恒夫先生ですね。林学ですが、菌類学の権威です。私は、キノコの会の会員ですが、キノコの会の顧問をしていただいています、キノコ採りというのは、ヤバイ趣味なんですよ。ヤブをこいだり、人の山からキノコをいただいたりするわけですから、なんとかイメージチェンジするべく、インテリを頭にいただこうとして、五十嵐さんの指導を受けているわけです。御夫婦なんです。五十嵐八枝子さん、五十嵐恒夫さん、そして、この人を、叔父さん、叔母さんと呼んでいる人が、うちのボラレンの五十嵐君。学者を叔父さん、叔母さんにいただいて、プレッシャーを感じているか聞きたいところですが、五十嵐君は五十嵐君で、化学のベテランですから、ちょっと方向が違うんで、ニコニコして鼻を高くしているんでないかと思えます。

この五十嵐先生の花粉分析学は、我々はいたるところで、この方の文献にお目にかかるので、この問題にふれておかなければなりません。

花粉は花粉症で有名ですよ。クシャミが出たりして、あの花粉なんです。あれが、ブナの追跡に非常に役立ったというのは、花粉といってもあまりにも微細なのでよく見えないんですよ。顕微鏡の世界なんですけれど、ちょうど、ラグビーや野球のボールのあんな格好の花粉を考えていただければわかりやすいと思います。あの縫い目みたいな模様があって、皮をかぶって、このまま空中に放散しますと、生き物ですから、酸素の供給があれば、ただちに分解して、消滅してしまうんですね。ところ

が、これが、バァーッと散ると、ものすごい数なんですね。一枝の花をふると、だいたい10億個あるという、ものすごい数をばら撒いているわけです。ですから、落ちて堆積する、バァーッと遠くにもばらまかれるけれど、自分の足元に結構量的に堆積するんですね。それで、その花粉のボールの中味をひっぱり出すんです。中味を出しておかないと、空気にあえば、どんどん分解して消滅してしまいますから、まず中味をひっぱり出して皮だけを残す。

ひっぱり出したら、プレパラートにこすりつけて、標本作りをする。その皮を構成している炭素のうち ^{14}C だけは放射能を発散しているのです。それが放射能を発散してどんどん放射能が減って行って、しまいにはゼロになる、この ^{14}C の半減期である5000年たつと、放射能が半分になるわけです。この関係を比例で細分化していくと、1万年前から3万年前くらいは、10年単位くらいで、放射能測定で分析できるんです。それで、おあげしました、次のページを御覧ください。この五十嵐先生は、日本全土を歩いて、ブナの分布図を作っているわけです。1万年前はどこに集中的にあり、5000年前はどこに集中的にあるか、みな作ったわけです。大変な努力であったと思います。

それで、4ページの図面を見ていただきますと、図面が4枚ありますが、北海道の道南と青森、秋田の一部が入っていますが、一番左の図は青森の所で○印が止まっている、そうすると、○印の年代測定は8000年から9000の間のものだということが、放射能測定でわかっている。そのころ北海道にはブナは1本もないんです。全然でてこない。この花粉の集めかたなんですから、一番いいのは空気にもふれないようにしなければもたないんでして、空気にもふれないようにということは、水につかる、それから粘土、泥炭、場合によっては岩石の中にとりこんでしまう、それから、土器類など密閉された粘土質の中で、 ^{14}C そのまま保存されているわけですが、放射能だけはどんなことがあっても量を減らしているわけです。ですから、放射能を測定すれば、掘り出したものが何年代のものかがわかるわけです。

そういう測定を五十嵐先生がやって、左側2番目、この位置からいうと、北海道に渡った、6000年前、この地点は函館の蓬揃山(ヨモギノエヤマ)でして、この山は乱開発で、ゴルフ場ありで、表土がむしられ、花粉測定に格好の場所ということで、先生はここに着目して掘ったところ、6000年前のものであることが確認されたわけです。この蓬揃山の花粉が話題をよびました。証拠物件として、一番たしかなのは、大量のブナの花粉があれば、そこにはブナがありましたということになるわけです。それから、オホーツクの海岸で、まま発見されているブナの実、海に落ちたブナの実がは

るばるオホーツク海岸に到達したもので植えると発芽したそうです。その生命力はしたたかなものです。それからもう一つは、函館の浜辺に流れついて、小鳥がついばむ。カケスなんかは、最高14個のドングリをホッペタに入れることができるそうです。そういう形で運んで、食べ残しがでる。それが発芽したとも考えられるし、縄文人が、東北はブナの宝庫ですから、ブナの実を大量に持ってきて物々交換して、北海道の原住民が食べ残し、あるいはこぼしたものが発芽し成長したのではという仮説も成り立つわけです。

とにかく、ここにブナの木があったという、はっきり確認できたわけです。それから、3番目の図の道南のちょっとでっばった所、東瀬棚のウグイ沼という所なんです。そこで大量のブナ花粉が発見された800年から900年前のものということですから非常に新しいものなんです。私はここで東瀬棚の営林署長をやっていたので、このウグイ沼というのは、そんなに大きな沼ではないんです。特徴は、沼の中に島が一つ、風の波間に漂って、流れているわけです。島の大きさは10m四方で大きな木が生えていて、これはかって沼のへりの、でっぱりが離れて動きだしたものです。

花粉学者の五十嵐先生は、それに目をつけたのです。その風のまにまに漂っている浮島をずーっと掘って行って、そこに花粉を年代別に追っていくと、立派にそこにブナが成長していたという証拠の花粉を発見しているのです。その辺の泥炭地をどんどん調べていくと、ブナの800~900年前の姿がおぼろげに浮かびあがってくるのです。それから、350年前の花粉が黒松内に大量にでたわけです。そうすると、青森からはるばる渡ってきたブナの木が、こういう年代順で分布を広げたという説が決定的に、五十嵐先生の調査で決定したわけです。

この前までは北海道の中央部までにブナの木があったとされていました。ところが氷河期や羊蹄山が爆発して、ブナの木が消滅して、黒松内あたりまで退却したとされていました。目名の付近を調べているうちに、ブナの若い芽というのは、晩霜に非常に弱い、せっかく芽を出したブナの芽が、かれてしまう。それで、晩霜のある温度をたどってくると、歌才付近を横切った線が、北限になったと信じられていました。

それが、五十嵐先生の花粉の追跡によって、全然見当違いをしていたことがわかったわけです。ウグイ沼は観光の名所でもあり、浮島音頭で芸者が踊っているのをぼんやり眺めているとき、花粉学者は花粉を採取していたのです。全然気がつかなかったわけですし、いささか気恥ずかしい思い出があります。

日中の日の長さが、ちょうど植物の成長期に、日本一の長さになるんです。例えば、オオイタドリは、本州のイタドリより大きい。大ブキと称して、北海道のは、も

のすごい大きい、それは日の長さに関係があるのではないかということが、ブナにどのように関係しているかも研究課題です。もう一つは、ブナが、なぜこんなに攻め込んできたのかという疑問がわいてくるのです。

五十嵐先生が5mぐらい掘って分析して、年代をを刻んでいくと、ブナが占領をはじめた時がピシャとでできます。ブナの前に何の木があったかと言うと、黒松内の地域は、トドマツ、エゾマツ、一番活躍していたのがミズナラなんです。オニグルミや他に、いろいろでできたのですが、或る時期にそれらをブナがどうやって、征服したのかということが疑問になってきます。

この問題に取り組んでいるのが、渡辺定元氏です。この人は定山溪の署長をしていましたが、北大出であるにもかかわらず、富良野の東大演習林長になり、ドロ亀先生のを引き受けて、今は三重大学の教授です。この人が、島牧に大平山という山があるんですが、エーデルワイスが一番近い、オオヒラウスユキソウを公表して学名にワタナベと名前がつけられています。僕も何回か登ってみて、北海道のウスユキソウそれはオオヒラウスユキソウだなと思うのです。ウスユキソウには、その土地の名をかぶせる、そして、日本のウスユキソウの標準種が、岩手県の早池峰、これが標準ですとされています。

ハヤチネウスユキソウ、オオヒラウスユキソウ、キリギシウスユキソウ、一番貧弱なのがレブンウスユキソウ、可愛らしいが、いじけたようなウスユキソウ、僕はスイスに行っていないのですが、人の話しでは、やはり、オオヒラウスユキソウが一番エーデルワイスに近いと言っています。スイスも哀れなことに観光客にむしられて、いま慌てて植えているそうです。

この、渡辺定元さんが、どうもこの山が気になるという、普通一番すそにブナがあって、その上手にダケカンバがあって、その上手に這松があり、そして頂上がある。それが、ブナが下から、だんだんのしあげて、そして、ダケカンバを追い抜いて、更に上を目指している。こんなことあり得るのだろうか。要するに、条件が悪い石灰岩の山ですから、上の方に行くと、石灰岩ばかり、そこをめがけてブナが上がっていく。おかしいということで、だいぶ前から調べている。それで、石灰岩については、ブナは耐性に強いものがある。それで冒頭申し上げたように、ドイツの先生方々が、母の木といっているブナも、石灰岩の所が多いんだそうです。

そうすると、石灰岩の所は好きじゃないといっている植物達が、よれよれしている間に攻め込んできたのではないかというのが、今の仮説なんです。例えば、ある年地滑りをおこしてその時ブナが入込み、本来ならばシラカンバがパイオニアとして入

るのですが、そのシラカンバに負けないでブナが入ってきたという仮説に立たなければ、道南全部がブナ一色になったきっかけがわからない。パッチワーク状に拠点を打って、拡大したのではないかという仮説も成り立つ。

ちょっと、お喋りしすぎましたが、かんじんな所が時間がなくなってきました。そんなことで、皆さんのお手もとに歌才のブナ林についてのプリントがいていると思いますが、これは、黒松内の町長さんが、ぜひ皆さんにと、いただいてきた資料です。この中に歌才ブナ林、ここに髭のはえた先生が載っていますが、新島善直、この人がまっさきに天然記念物にしようと言言し実現に努力したすぐれた学者です。

その下のところを見てください。「伐採の危機を乗り越えて」とありますが、木製戦闘機のプロペラ材として伐られそうにと、うまく書いてありますが、ここは本来ですと、伐採危機は、川端という宮林署の署員がブナを伐りかかったところを、館脇操先生が、川端を押さえて、ブナは生き残りました、と書く段取りなんです。私はあの当時26才ですから、右も左も分らない青二才でした。上の人は、おまえがやれと言うので僕は薪にしかならない山だから、どうせなら、目名のブナ林を天然記念物に振替えたらと言言して「たわけ者」と先生におこられました、そんなことで、ブナ林が事なきをえたのと、町長さんは書きたかったのでしょうか、こういうふうに書いたんですね。町民も薪にしかならない、たいしたものではないとしか見ていなかったんですね。薪にするなら我々も買う。飛行機のプロペラ材に売った残りを薪にするか、それを全部町民がもらいます、という話しがどんどん出ていたんです。それをその通り書くと大変なことになるわけですね。僕の名前は書かれたって平気ですが、川端という青二才が伐ろうとしたのを、町民が阻止したと書けばよかったのかも知れません。

要するに、プロペラは、マカバの木じゃなければだめなんですよ。ブナの木をプロペラにして、それでもいいというのは、なんのことはない模擬飛行機なんですね。模擬飛行機をいっぱい作って飛行場に並べて置くと、敵が爆弾を盛大に落として敵の消耗を期待する。この辺のことは、もう文章化して、黒松内町長さん宛てに届けてあります。うちの機関紙「エゾマツ」にも届けてあるので、そこに詳しく書いてあるので、御覧になっていただきましょう。

大変、色々はなして、分りにくかったと思いますが、どうしても、おぼえておいてほしいことは、五十嵐先生の放射能の研究による年代測定の方法がある、ということ、を是非忘れないでほしいということです。どうか、ひとつ関心を持っていただきたいと思ひます。これで終わらせていただきます。（拍手）

観察会研修会 情報

10月以降のボランティア・レンジャー協議会主催の自然観察会

◎「野幌の自然観察会」 野幌森林公園

平成10年11月15日(日) 10:00~12:00 下見 11月8日(日)

集合場所 野幌森林公園内北海道開拓記念館前

10月以降のボランティア・レンジャー協議会が協力する自然観察会

(野幌森林公園事務所主催)

◎「秋の森の観察会」 平成10年10月18日(日) 9:30~14:00 下見 10月11日

集合場所 野幌森林公園大沢口 (11日・18日共に昼食をご用意ください)

◎「12月の森の観察会」 平成10年12月3日(木) 10:00~12:00 下見 11月26日

集合場所 野幌森林公園内北海道開拓記念館前

◎「1月の森の観察会」 平成10年1月14日(木) 10:00~12:00 下見 1月7日

集合場所 野幌森林公園内北海道開拓記念館前

《 1月以降の観察会の情報は、次号でご案内します 》

インターネット ホームページ公開中

北海道ボランティア・レンジャー協議会の、ホームページの試行版をインターネット上に発信
しています。ぜひ、閲覧のうえご意見をお寄せください。概要は次のとおりです。

- ◇ **タイトル** ようこそ森へ
- ◇ **内容** ○北海道ボランティア・レンジャー協議会の素顔
 - ・当会の活動状況など会での概要を紹介しています。
- 自然観察会への誘い
 - ・自然観察会の年間予定と観察会での観察のポイントを紹介しています。
- 森の四季
 - ・「春」、「夏」、「秋」、「冬」にわけてそれぞれ10枚前後の植物などの写真で構成しています。
- 野幌NOW (今後掲載予定)
 - ・野幌森林公園の近況や、イベント情報、お知らせなどを掲載予定。
- ほられん情報
 - ・観察会のより詳しい情報や、自然に関するミニエッセイなど掲載予定。
- ◇ **アドレス (URL)** <http://www.sp.dlanet.or.jp/~hlguti/>
- ◇ **リンク先** ・北海道環境サポートセンター

このホームページの制作、運営は樋口達郎が担当しています。ご意見や助言をお願いいたします。

004-0054 札幌市厚別区厚別中央4条4丁目6-1-404号

tel・fax 011-892-2096

Eメール hlguti@sp.dlanet.or.jp

ようこそ森へ

1/1 ページ

北海道ボランティア・レンジャー協議会 ホームページ

ようこそ森へ



—目次—

北海道ボランティア・レンジャー協議会の素顔
観察会への誘い

森の春 | 森の夏 | 森の秋 | 森の冬

野視NOW (工事中)

ぼられん情報 (工事中)

Internet Explore 3.0, Netscape Navigator 3.0以上でご覧ください。



北海道環境サポートセンター

自然や環境に関する事、各NGO団体活動、行政機関の自然環境活動、資料や文献等の情報を知ることができます。会員の皆様も一度訪ねてみてはいかがでしょうか。
よう。

場所 札幌市北区北7条西5丁目 千代田ビル 1F

編集後記

◆暑さを感じずあっという間に過ぎた今年の夏でしたが、はや紅葉の季節に入ろうとしています。エルニーニョ現象と関連しているといわれているこの夏の全国的異常気象が、植物の世界にどのような影響を与えているのかを、日々の自然観察を通して確かめていくことも必要なのかも知れません。

◆今年度のボランティア・レンジャー育成研修会が7月17日～19日 様似町アポイ山荘でおこなわれました。研修を修了されて会員となった23名を本号で紹介いたしました。これを機に入会された皆さんが、会報「エゾマツ」を通してさまざまな意見や情報を発信してくれることを期待します。

◆本号が会員の皆様の手が届く頃は、紅葉・落葉が始まります。春・夏に各地で行われた観察会もまとめや整理の時期になることでしょう。それらの情報やまとめた資料がありましたら、ぜひ広報部までお寄せください

北海道ボランティア・レンジャー協議会

会報誌「エゾマツ」46号 1998.10.12 発行

発行責任者 大友 健

(表紙絵 広報部 三崎 篤)